

第3章 「花の都ぎふ」花かざりコンクールについて

3 - 1 岐阜県の緑化に関する行政の取り組みについて

3 - 1 - 1 「花の都ぎふ」推進運動について

岐阜の街並みを歩くと、街路樹である緑の多さと、一般住宅の軒先や庭に飾られたの色とりどりの花のコンテナの多さに驚く（図 3-1）。県が唱えている「花のまちづくり」の雰囲気を、あちらこちらで感じる。

本研究で対象とする「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」は、岐阜県が県ぐるみで取り組んでいる「花の都ぎふ」推進運動の一環として始まったものである。この「花の都ぎふ」推進運動は、2000 年で 10 年目という節目を迎えている。



図 3-1 花で彩られた軒先（岐阜県安八町）

（1）「花の都ぎふ」づくり

岐阜県の HP¹⁾ では「花の都ぎふ」づくりについて以下のように紹介されている。

県民のみなさんから寄せられた 6 万件の夢投票を分析しますと、共通の願いは、人と人、人と自然との「共生」であり、「ふれあい」です。このことは、県民の皆さんが将来に向かって「ゆとりをもって生活を楽しむ」事のできる楽しい地域作りを望んでいると言えます。

したがって、「花の都ぎふ」運動は、「ゆとりをもって生活を楽しむ」といういわば 21 世紀型生活文化の先取り施策として、「花の都ぎふ」運動を県民総参加で推進していきます。

< 岐阜県土木行政概要より抜粋 >

3 - 1 - 2 「花の都ぎふ」推進運動として取り組んでいる事業

「花の都ぎふ」推進運動としては以下のような事業が企画、実施されており、本研究の対象とする「花の都ぎふ」花かざりコンクールもその中に含まれる。以下はコンクール主催者である「花の都ぎふ」花と緑の推進センターの HP²⁾ を参考にまとめたものである。

寄せ植え華道研究会

花や緑の寄せ植えを楽しみながら、植物の特性や栽培技術、花かざりの際の植物の組み合わせ、カラーコーディネート、花を活用した各種セラピー等の幅広い分野について学習し、欧米の花かざりと日本古来の「和」の文化を融合した新しい花の文化を創設していく。

花は見て楽しむだけでなく、花の形や色、香りによって、また花づくりの体験そのもの

に心や体を癒す効果があり、花を活用したさまざまなセラピー等も行われている。花をつくり、かざるためのノウハウを基礎から勉強して知識や技術を身につけ、更に独創的な花かざりを生み出していこうというのがこの研究会のねらい。

花の都ぎふ推進運動協議会

「花づくり」と「花かざり」が一体となった「花の都ぎふ」運動を推進し、「日本一住みよいふるさと・ぎふ」、「世界のふれあい広場・ぎふ」の実現をめざすために、平成3年1月に設立された。

全県的な運動を推進するために、(財)花の都ぎふ花と緑の推進センター内に事務局があり、地方の組織として各県事務所内に事務局が存在する。

(財)花の都ぎふ花と緑の推進センターと設立目的は一緒だが、花の都ぎふ花と緑の推進センターは、行政と民間の皆様を繋ぐパイプ役を担い、花の都ぎふ推進協議会は、民間の各団体のメンバーで構成され、民間レベルでの運動を推進している。

緑と花のインストラクター

広く県民に森林等自然環境の総合的な仕組みや働きに関する知識を普及啓発し、自然に対する理解を深めると共に生活環境を「緑と花でかざるボランティア活動」を展開する指導者である。

緑花文化賞

「花の都ぎふ」運動に積極的に取り組み、地域の花かざりに特に熱意のあった団体、個人に対して、これを契機により一層の活躍を期待し、表彰するもの。表彰は毎年おこなわれる。

花フェスティバル

98年に日本で開催された、英国祭 UK98 に呼応し、花かざり先進国である英国の花文化をテーマに花フェスタ記念公園において『花フェスティバル'98』を開催した。イングリッシュガーデニング展、イングリッシュガーデニングデモンストレーション、ハンギングバスケット体験スクール、寄せ植え体験スクール、押し花絵体験スクール、花と香り教室(盲学校生徒招待)、バラまつりなど、様々な催しが行われた。

花壇デザインコンテスト

可児市にある「花フェスタ記念公園」内の花壇を岐阜県内の団体によってデザインしてもらい、県民の手によりそのデザインのとおりの花を植え、育ててもらう。各賞は「花フェスタ記念公園」を訪れる人の人気投票により決定、選ばれた人には賞状、賞金を授与する。

花のまちづくりコンクール

農林水産省と建設省が提唱、財団法人日本花の会が主催する全国規模のガーデニングコンクール「花のまちづくりコンクール」が毎年開催されている。岐阜県としても「花の都ぎふ」花かざりコンクール上位入賞者の同コンクールへの応募を積極的に奨励し、県のガーデニング、ガーデナーの一層のレベルアップを目指している。同コンクール入賞率において、岐阜県は全国トップレベルである。

花とのふれあい講座

平成9年度からNHK岐阜放送局とタイアップし、「花づくり花かざり」をテーマにしたおしゃれな講座を企画・実施している。

平成9年度は、「だれでもできるワンポイントガーデニング」、「ハンギングバスケットの作り方」等のテーマで、NHK岐阜放送局において4回開催し、毎回約70名の参加があった。平成10年度は「バラを育てる・バラを楽しむ」、「クリスマスの花かざり」というテーマで2回開催し、講師の実演とともに、参加者は実際にバラの植え方やクリスマスリース作りが実施された。

これらの講座の参加案内は、NHK昼の番組「おしゃべりらんち」で放映され、毎回定員の50人を大幅に超える参加申し込みがあり、花づくりや花かざりへの関心の高さが伺える。

花の都ぎふ推進基金助成事業

花の都ぎふ花と緑の推進センターが、「花の都ぎふ」運動の推進のため、「花の都ぎふ」づくりに熱意のあるボランティア団体等に対し、花苗等の購入費の一部を助成する。

花の都ぎふ海外研修

「花のアドバイザー」のメンバーの地域活動を促進することを目的とする。幅広い、特に海外の高度な知識・技術を取得して地域活動に役立てもらうため、花の先進地であるヨーロッパの先進諸国へ「花のアドバイザー」のメンバーを派遣している。

ぎふ花の散歩道

花の都ぎふ花と緑の推進センターが、花と緑を巡る旅で、心温まる人情を味わい、その土地の味と出逢う、花と緑の情報番組『はなと緑の夢紀行』を制作。

花街道整備事業

全県にわたり花街道整備事業を推進している。沿道に花木を植栽することで、四季折々の景観とともに、岐阜県の誇る美しい自然を楽しんでもらおうとするもの。

ぎふ国際ローズコンテスト

英国王立バラ協会協力の下、財団法人花の都ぎふ花と緑の推進センターが毎年花フェスタ記念公園を会場に開催するコンテスト。世界各地の育種家が保有する、優れた特性を持ったバラや新しく育成されたバラを対象とし、日本の気候に適した優れたバラを広く国内外に紹介することを目的としている。

3 - 2 「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」について

3 - 2 - 1 「『花の都ぎふ』花かざりコンクール』の概要

「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」(以下「花かざりコンクール」と略記)は、「花の都ぎふ」推進運動(3 - 1 - 1 参照)の一環として始まった。コンクールの開催は、平成4年度の第1回から数え、今年で9回目を迎える。都道府県が主催する同種のコンクールとしては全国に先駆けて始まったものであり、比較的歴史のあるガーデニングコンクールである。花かざりコンクールについて、概要を以下に述べる。

(1) 目的

このコンクールの目的は、花かざりコンクール応募用紙によれば以下のように述べられている。

花は人の心を和ませ、夢を抱かせ、希望を与えてくれます。「21世紀は心にゆとりが求められる時代」といわれており、岐阜県では現在、県民の力を結集して、「花づくり」と「花かざり」が一体となった「花の都ぎふ」運動を楽しく、華やかに展開し、「日本一住みよいふるさと岐阜県」「世界のふれあい広場・ぎふ」づくりを推進しています。「花かざりコンクール」は、美しく潤いのある生活環境の創出を行っている個人・団体等を広く募集、顕彰することにより、県内のまちやむらを花で美しくかざり、「花の都ぎふ」運動の県民総参加での展開を促進することを目的とします。 <花かざりコンクール応募用紙より抜粋>

(2) 主催・共催

岐阜県と財団法人花の都ぎふ花と緑の推進センターが主催し、「花の都ぎふ」運動推進協議会との共催となっている。

(3) 対象

対象は、「庭・生垣・壁面・花壇・農用地等が花で飾られ、快適な環境作りと景観の美化に取り組んでいる建物、施設、地域」とし、「個人」、「市町村」、「団体」、「企業」、「店舗」の5部門に分かれている。本研究の対象とする個人部門では、個人による道路沿いの塀、生垣、テラス、窓辺、壁、バルコニー、転作水田等農地利用による花畑などの「花かざり」を対象としている。

(4) 申し込み方法

応募用紙により、本人、あるいは推薦者が申し込む。応募者は応募作品である花かざりを主体的に管理している者。

申し込みから審査結果の発表までのスケジュールは表 3-1 のようになっている。第 8 回、第 9 回ともに同じ日程で審査が行われていた。

表 3-1 コンクール応募から審査結果発表までのスケジュール

時期	スケジュール
4月14日～6月20日	申し込み
6月21日～7月14日	一次審査 書類審査
7月15日～8月10日	二次審査 書類審査
8月11日～9月15日	現地調査
10月1日以降	審査結果通知
11月	表彰

(5) 審査

1) 審査のポイント

一次審査・二次審査共通の「審査のポイント」として、応募用紙には「環境との調和」、「地域風土を活かした表現」、「デザイン」、「維持・管理」、「今後の取り組み」の 5 つが記されている（図 3-2）。花かざりコンクールの特徴は、花かざりや花づくりなど、直接花に関係するものだけでなく、「今後の取り組み」にみられる「地域への波及性」など「花のまちづくり」を視野に入れたものを審査基準として含めた点であるといえる。審査の際には 5 つのポイントを考慮しながら評価が行われている。花かざりという「作品」とガーデナー自身という「人」が、総合的に評価されていると思われる。

環境との調和 花による美しい環境づくり ● 花と緑との調和 ● 空間の有効な活用	地域風土を活かした表現 花による地域の自然・社会、文化的資産を活かす ● 地域の気候風土を活かす
デザイン 花等の素材選択と組み合わせ、センスあるトータルコーディネート ● 花と周辺とのトータルコーディネート ● フラワーコーディネート ● 花の季節感豊かな演出	維持・管理 草花や樹木の健全な生育状態 ● 健全な生育状態 ● 開花の状態 ● リサイクル ● 生育管理上での工夫
今後の取り組み 花のまちづくり運動の取り組みの姿勢や状況、効果 ● 継続性 ● 協調性 ● ホスピタリティー（歓迎性） ● 向上性 ● 独創性 ● 波及効果	

図 3-2 「花の都ぎふ」花かざりコンクール審査のポイント（コンクール応募用紙より抜粋）

2) 一次審査(第8回から実施)

ア. 審査委員

「花の都ぎふ」推進支部長、副支部長、および花のアドバイザー³⁾等6人以内

イ. 審査方法

一次審査は、書類審査により、各圏域において、各県事務所にある「花の都ぎふ」運動推進連絡協議会が中心となって行われる。第8回では個人部門で5点以内(図3-3)第9回(図3-4)では基本的に1点は推薦するものとして各部門の全体応募者数の25%以内が二次審査に推薦された。一次審査審査委員の選定、作品の選定についてはすべて「花の都ぎふ」運動推進連絡協議会に任せられている。本部である「花と緑の推進センター」は審査委員の選定基準、現地調査の審査基準を参考までに各事務所に知らせているが、共通したもとしての「一次審査マニュアル」のようなものは作成していない。したがって、審査委員会での合議によって一次審査通過者を決定する地域や、各審査委員の投票とその集計により決定する地域など、「評価のものさし」や方法は地域によって異なっている。本部によると、おそらく応募用紙の写真に多分に重点が置かれているのではないかという話である。

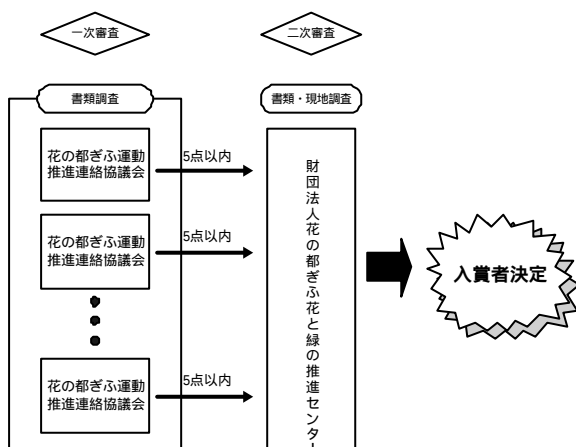


図3-3 第8回花かざりコンクール審査の流れ

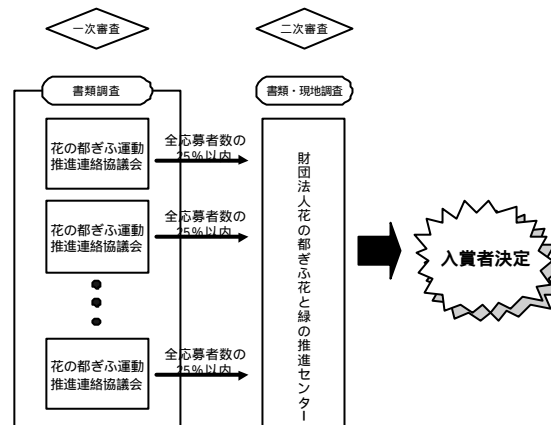


図3-4 第9回花かざりコンクール審査の流れ

3) 二次審査

ア. 審査委員

花づくり・花かざりの専門家 11人

イ. 審査方法

一次審査通過者作品を対象として、書類審査および現地審査が実施される。現地審査は書類審査で上位となった「花かざり」についてのみ行われる。現地審査を受けるものに関しては事前に通告されており、審査当日には応募者自身も立ち会い、「花かざり」について審査委員に説明やアピールをすることができる。

(6) 表彰

1) 毎年 11 月に表彰式を行う。優秀な「花かざり」について各部門ごとに賞状と楯が贈呈される。

金賞：1 点、銀賞：2 点、銅賞：2 点

2) 2 年連続して金賞に相当する「花かざり」については大賞が贈呈される。

3) 審査委員会が特に認定した「花かざり」や取り組みに対して、審査委員会特別賞が贈呈される。同賞の受賞人数に関しては、特に制限はない。

4) 上記の賞以外に、奨励賞が贈呈される。同賞の受賞人数に関しては、特に制限はない。

本研究では、金賞、銀賞、銅賞、審査委員会特別賞、奨励賞の受賞者を総称して入賞者と呼ぶこととする。

(7) その他

1) 大賞、金賞、銀賞、銅賞に入賞した人は、一年間にわたり新聞、県関係広報紙等で名前や「花かざり」の写真が県内に広報される。

2) 花かざりコンクール上位入賞者については花のまちづくりコンクール(表 1-3 参照)への応募を奨励することがある。

3 - 2 - 2 「花の都ぎふ」花かざりコンクールの現状と課題

(1) 花かざりコンクールの現状

1) 応募者について

応募者の年度別推移

花かざりコンクール個人部門への応募者は、今では全体の応募者の半数以上に上っている(図 3-5)。また、個人部門に限ってはその応募者数は年々増加傾向にある。これは昨今のガーデニングブームで、ガーデニングがより日常的な意味を持ち、多くの人々の間で楽しめるようになってきた背景が大きく影響している。また、それらの流れを汲み、数年前からガーデニング雑誌や自治体などによるガーデニングコンクールも盛んに開催されるようになってきており、花かざりコンクールの応募者の中には他のコンクールへも参加するガーデナーがみられた。

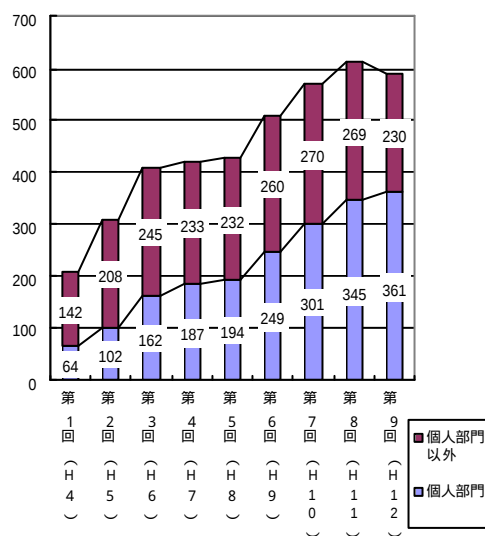


図3-5 花かざりコンクール応募者の年度別推移(人)

応募の動機と庭に対するガーデナーの思い

花で飾られた庭や軒先は、私的な空間でありながら公的な役割も果たしている場所であり、そういった「共的な」空間に対する様々な思いは、コンクールという場にも表れる。

数人のガーデナーへのヒアリングによると「ぜひとも賞をとりたい。」「自分の自慢の庭をぜひ見てほしい。」「庭がきれいだと評判になっていると聞いた市のほうから、直々に出品の要請があった。」「コンクールがあるというのを聞いて、せっかくだからとただなんとなく出品した。」「好きでやっているだけ」など、応募者によって応募の動機は様々であることがわかった（図 3-6）。応募者の中には、応募しながらも、「自分の愛する庭を評価されるのはなんとも複雑だ」と思っている人もいる。コンクールには、さまざまな動機を持った人が集まっている一方で、ガーデナーの中には、他人から評価されたくないし、表に出るのも恥ずかしいという気持ちから、コンクールには応募には興味がない人も多いと推測できる。コンクールのあり方を論じていく上では、「コンクールに応募しないガーデナー」の意識特性の把握も必要であると考えるが、本研究ではこういったガーデナーについては意識調査の対象外とした。

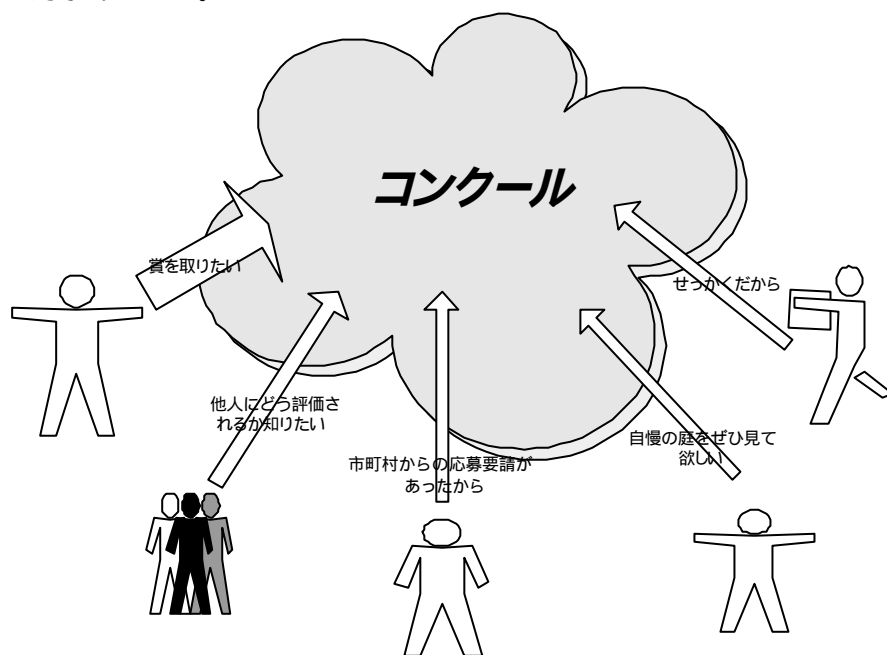


図 3-6 コンクール応募の動機

2) 花かざりコンクール個人部門入賞者について

花かざりコンクール個人部門入賞者の地域分布

第 1 回から第 9 回までの花かざりコンクール個人部門入賞者の地域別分布を図 3-5 に示す。

地域別にみると、入賞者は多治見市、可児市の順に多い。多治見市や可児市は名古屋近郊のベッドタウンであることから、比較的若い世代が暮らす新しい家が多く、子育ての合

間や子育てが一段落した後の楽しみにガーデニングを楽しむ人が多いと思われる。また、可児市には日本一のバラ園や花づくりを楽しむ人のための各種施設・設備が整っている花フェスタ記念公園があり、花やガーデニングを気軽に楽しんだり、ガーデナー同士の情報交換などができる環境が整備されている。それらが両市のガーデニング技術のレベルを高くしている要因の一つとなっていると考えられる。他の市町村の数多くのガーデナーが、花苗やバスケットなどのガーデニンググッズを買い求めるために多治見市や可児市を訪れることも多々あるようで、そのような店舗が集中していることも、ガーデニングを行うに恵まれている環境を支えているものと思われる。

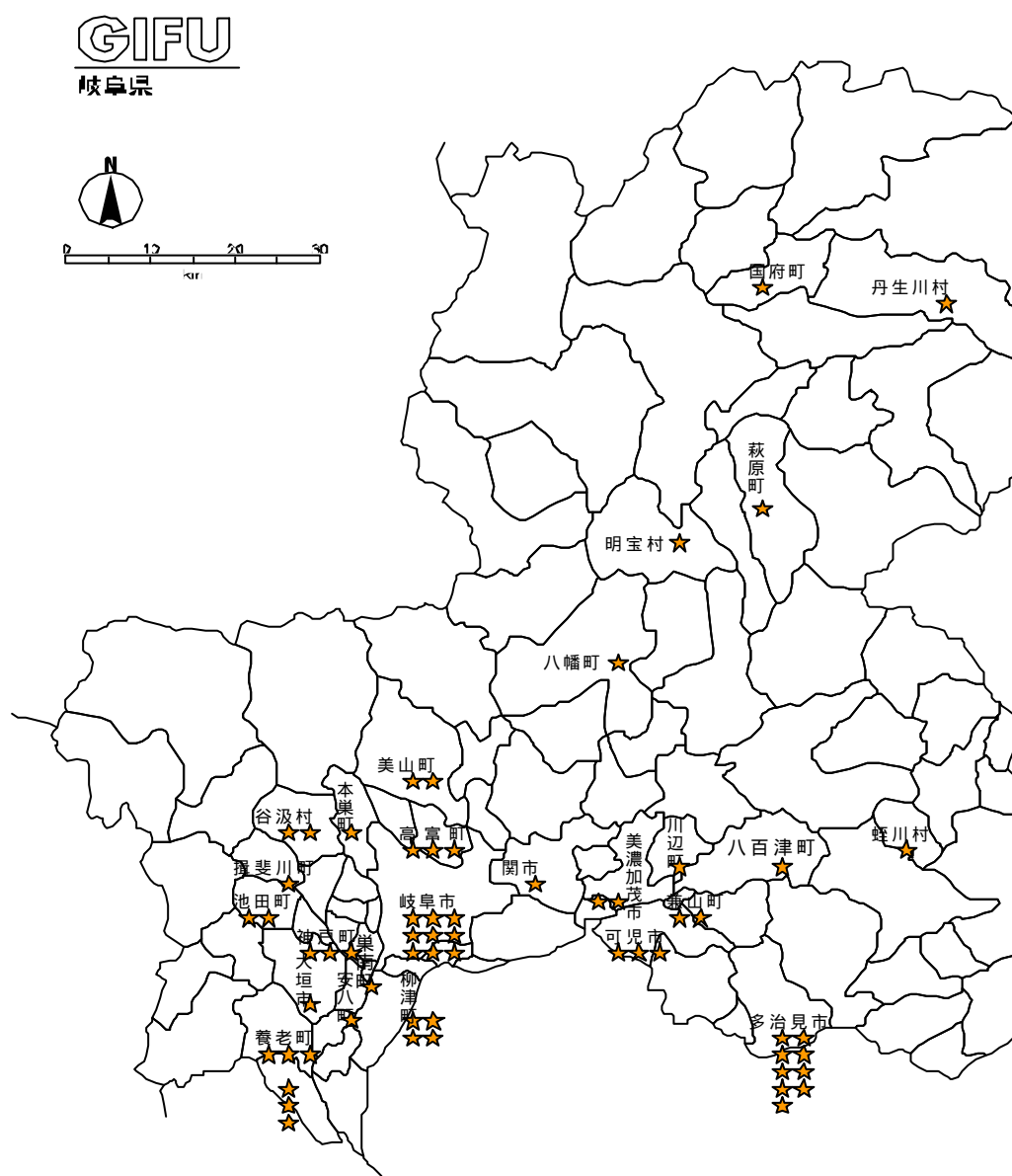


図 3-7 入賞者の分布

★ ……入賞者

入賞者の広報と花かざりコンクールへの注目

花かざりコンクールで大賞、金賞、銀賞、銅賞を受賞した物件については、主催者である「『花の都ぎふ』花と緑の推進センター」が県下全域に配布する『花の都ぎふだより』や花と緑の推進センターホームページ⁴⁾にて広報される。特に上位入賞者については、入賞者の名前だけでなく入賞物件の写真も紹介されている（図3-8）。



図3-8 入賞物件の写真（花と緑の推進センターPより）



図3-9 新聞記事（岐阜新聞 99/10/20）

また、審査結果の発表は、毎年各新聞でも大きく取り上げられており、マスコミの注目も高い（図3-9）。このような広報に伴い、住民からの反応も大きい。「ぜひあの入賞物件を見に行ってみたいので詳しい住所を教えてほしい」など入賞物件についての問い合わせや、「なぜあそこのうちが入賞してうちは入賞しないのか」といった審査結果についての苦情が、毎年コンクールの時期に本部の花と緑の推進センターや各市町村に寄せられているという。

3) 花かざりコンクールの効果

主催者である花と緑の推進センターの足立氏や、数人の応募者へのヒアリングに基づき、花かざりコンクールの効果について次のようにまとめた。

第一に「ガーデニング技術の向上」である。お互い競いあうことが刺激となり年々技術は向上しているという。それは全国規模でのガーデニングコンクールである花のまちづくりコンクール⁵⁾において、岐阜県から多くの入賞者を出していることにあらわれている（表3-3）。

表3-3 花のまちづくりコンクールにおける過去3ヵ年入賞者（岐阜県）

年度	部門名	受賞内容	受賞者
平成10年度 (第8回)	個人部門	最優秀賞(建設大臣賞)	金原すみよ(多治見市)
	市町村部門	優良賞(推進協議会長賞)	安八町
平成11年度 (第9回)	個人部門	農林水産大臣賞	勝野千枝子(可児市)
		農産園芸局長賞	糟谷美枝子(兼山町)
		花のまちづくりコンクール推進協議会長賞	小嶋キヨ子(多治見市)
	企業部門	農産園芸局長賞	平田悦子(岐阜市)
		花のまちづくりコンクール推進協議会長賞	広瀬洋服店(大垣市)
平成12年度 (第10回)	個人部門	建設大臣賞	Coffee&Breadコットンハウス(美濃加茂市)
		花のまちづくりコンクール推進協議会長賞	竹内みさと(大垣市)
			寺島美紀子(岐阜市)

そして、第二には、コミュニケーションのきっかけづくりである。先のように、見学などを通じて、入賞者と一般ガーデナーや入賞者間でも、花と緑に関するコミュニケーションが生じている。ある入賞者の話を記す。

「受賞が決まり、それが新聞で発表された次の日から、さっそく近所の人や、見ず知らずの人までもが、庭の見学にやってきました。入賞してから約 1 年間は、県下各地、遠くは県外からも、噂を聞いて花好きの方が庭を見に来てくださいました。見学はほとんど毎日あったのでその対応に追われて、一年間は旅行にも行けませんでした。最初は戸惑いましたが、嬉しい悲鳴でしたよ。」(第 6 回入賞者・女性)

彼女は、それらの見学がきっかけで、見学に訪れたガーデナーのうち数人と交流が始まり、現在も情報交換などをしているという。コンクールがきっかけとなり、自分のガーデニングの活動範囲や、視点に「広がり」を持つようになったガーデナーはこの人が例外ではなく、ヒアリングを行った他のガーデナーからも同じような意見を聞くことができた。花や緑は日常生活に深く密着しており、それらに対する人々の関心や需要は高い。花かざりコンクールは、コンクール入賞者という、高い技術レベルのガーデナーを世間に知らせることにより、ガーデナー同士のコミュニケーション生み出すきっかけづくりを促しているともいえる。

(2) 花かざりコンクールが抱える課題

しかしながら、花かざりコンクールの実施がすべてよい効果を生んでいるというわけではない。コンクール開催は 2000 年で第 9 回を数えるが、回数を重ねていくうち、効果と共に、さまざまな問題も徐々に見え始めてきている。以下に、コンクール主催者やガーデナーへのヒアリングなどから、花かざりコンクールの課題をまとめた。

入賞者が感じる負担

入賞に関する広報が広く流されることや、またガーデニングに対する人々の関心が予想以上に高いことで見学が殺到し、それまでのガーデナーの生活を大きく変えてしまうこともある。あるガーデナーは、入賞したあと感じた「負担」について次のように話した。「見学者の対応に追われ、自分の時間が持てなくなったんです。」(第 7 回入賞者・女性) この意見は、同じ状況ながら、見学を「嬉しい悲鳴」と受け取った先のガーデナーとは大きく見解が異なっている。主催者側は、県下各地への広報により、入賞者に名誉を与えるとともに、他のガーデナーにとって花づくりの手本になればという思惑があるが、予想以上の反応の大きさに対応が追いついていないというのが現状である。

さらに、「一度入賞してしまうと、それを知った周りから過剰に期待されてしまうこともあってそれがプレッシャーになる。」(第 6 回入賞者・女性) といった悩みを抱えているガ

ーデナーもいた。広く知らせるための広報でありながら、入賞者のプライバシーに配慮した広報のあり方について、大きな問題に直面している。

ガーデニング技術の向上がもたらしたジレンマと地域への展開

花かざりコンクール主催者側からは、次のような意見が聞かれた。「今からおよそ 10 年前、花かざりコンクールが初めて開催された頃は、ガーデニングも世間では今ほど盛んじゃなくて、とにかく花をたくさん飾っていれば入賞できていたんですよね。しかし、時代の移り変わりと共にガーデニングブームなどが追い風となり、次第に全体の技術レベルが高くなってくると、審査のポイントは『量』から『質』に変化してきたんです。コンクール応募者は、花や庭をどう美しく見せるか、どのように工夫して飾るかに夢中になっているようにみえましたね。そして、それらがエスカレートし、今は、花かざりコンクールは次第に技術のオンパレードのようになってきました。」(花と緑の推進センター・足立氏)

花かざりコンクールの目的の一つには、優れた技術を持つガーデナーを入賞者という形で世間に広く知らせ、そのガーデナーをキーパーソンとして地域の花づくりを活性化させていくことであった。しかしながら、技術ばかりが注目され白熱しすぎるため、花のまちづくりという目的がややなおざりになっており、主催者側としても頭を悩ませているのだという。

さらに、コンクール関係者の話では、高い技術を持っているガーデナーが地域の花づくり活動を誘導するだけの行動力を持ち合わせていることは稀であるということも聞かれた。審査によって、地域のキーパーソンとなりうる「マクロ的視点」をもったガーデナーを発掘し評価することができれば、花いっぱいのまちづくりの「火付け」が可能であるが、現状ではそのような「社会性」を計る審査基準が存在していない。

入賞への執着と応募者の偏り

また、コンクールへの注目と入賞への意欲が高まるにつれ、一部の入賞「常連」のガーデナーなどから、コンクールにどうすれば入賞できるかといったコンクール入賞についてのポイントがマニュアル化され、一部で広まっていると語ったガーデナーもいた。他のガーデナーからも、入賞が大きな目標になっており、毎年応募しているという話を聞くことができた。賞をとることへ執着するあまり、技術の競争が起こり、毎年同じ応募者が多数応募することになる。こういった応募者の偏りを生みつつあることもコンクールの問題点の一つともいえる。そのような問題を指摘する声は、コンクール主催者側からも聞かれた。

美しく庭を花でかざり、地域で評判となっていながらも、花かざりコンクールには応募しないガーデナーは多数存在する。そのようなガーデナーにとっては、花かざりコンクールはあくまで非日常的なイベントとして認識されている。彼らにとってコンクールに出品することは「恥ずかしい」ことであり、また「表に出たくない」や「コンクールなんて滅相もない」という気持ちが大きいという意見がヒアリングなどからうかがえた。そのよう

なガーデナーをどのようにコンクールに巻き込んでいくかについても検討が必要であることがわかった。同時に、花のまちづくりにおいてコンクールが最適な「手段」であるのかについても検討する必要があるといえよう。

(3) 方向性の見直し - 「人づくり」のコンクールへ -

「コンクールの入賞物件がその地域の花づくりの核になっているケースもあるが、全体的に見ればやはりまだ『点』でしかない。線から面へ発展させるには、コンクールのあり方、進め方等にも改良の余地がある。しかし、その地域づくりの中で行政がタッチしているのはどこまでなのか、それが難しい。単純に、花や緑の『量』を増やすだけならできる。

『地域づくり』という点でコンクールがどこまで踏み込んでいいのか。たかが花と緑のコンクールと言われてしまえばおしまい。」(花と緑の推進センター・足立氏)というのは花かざりコンクール主催者の話である。

2001年、コンクール開催10年目という節目を迎えるに当たり、コンクール主催者である花と緑の推進センターは、新たなコンクールの方向性を模索している段階である。

〔参考文献〕

- 1) 岐阜県土木行政概 <http://www.pref.gifu.jp/s11650/gaiyou/>
- 2) 花の都ぎふ花と緑の推進センター <http://www.pref.gifu.jp/center/top/page6.htm>
- 3) 県が地域住民や各種団体の人が身近に相談でき、その助言・指導ができるように各市町村に設置したもの
- 4) 花の都ぎふ花と緑の推進センター <http://www.pref.gifu.jp/center/top/page6.htm>
- 5) 財団法人日本花の会が主催し、全国から応募者を募るガーデニングコンクール